

史跡豊かな晩秋の

日田を堪能

安部 勝止

「秋の日田路を訪ねる会」と題する別府史談会主催のバス旅行が明日に迫った。そう思うと、なかなか眠れない。小学生の頃の旅行が思い出され、日曜だが当日は、いつになく早朝に目が覚めた。

この日の案内役は別府大学教授、後藤重巳先生である。定刻八時半すぎ、観光港上の花時計のある公園をあとに、一路玖珠路から水郷日田へ。総勢は三九名。観光コースではなく、史跡の由緒ある処をゆくとのことで、旅心と歴史へのロマンがますますかきたてられる。

バスの中での後藤先生の講話「なぜ日田の地が歴史の上で名を残すことになったのか」に参加者の耳目が集まる。盆地の中核にある日田は、かつて（古代）の太宰府と並んで九州（筑紫の国）の中央に位置し最重要地であること、地勢的にも小倉（周防灘）、南は熊本（肥後）方面、西は久留米（筑後）佐賀（肥前）から長崎へと通

じる。近世以降の日田は、まさに九州の交通の要衝地、政治的にも時代の権力者（徳川幕府）に注目され、九州支配の拠点にされたのであろう、と。

最初に訪ねたのは日田日隈公園、天領時代の「永山布政所」というより「日田代官所」のほうが判りやすい。

天領（幕府の直轄地）であったのは一六三九年〜一八六七年、幕府代官職は二名だったようだ。のちに府内にも、高松（現大分市）に代官所が置かれている。一七二四（享保九）年、日田代官所から「西国筋郡代」に格上げした（「大分県歴史事典」）。

代官所をあとに横山古墳群へ（講話あり）。これから、仏像八体が国重要文化財に指定されている慈眼山永興寺へ。この古刹の仏像は「毘沙門天」と「四天王」。いずれも平安朝から鎌倉初期の作品ではないか、という。二仏像の迫力には、参加者一同、ただ圧倒された。

毘沙門天は、もと印度の仏法の神様で、須弥山を守る守護神。これは今日、なお民衆に親しまれている「七福神」の一つに数えられている。他の「四天王」は帝釈天に仕え四方を守る護法神で、東西南北を護る武将である。この二つの仏像のほかに、当寺のご本尊は十二面観音像

である。観音像は全国に見られるが、観世音菩薩は衆生のあらゆる苦難を救い、願い事をかなえ、あまねく教化することを説いた仏、という。参加者、とりわけ女性の中には、母子観音像を想い出したのか、うっとり見られる人もいた。

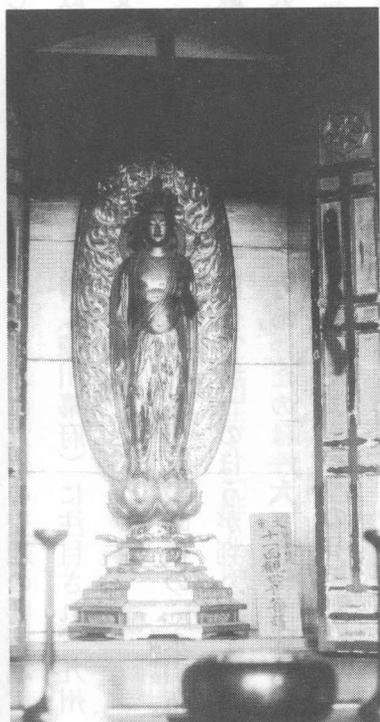
寺をあとに、つづいて大原八幡宮へと急ぐ。この地域の神社の総社で、社格は旧県社。祭神は応神天皇・神功皇后・比売神三座で、宇佐八幡宮と全く同じ。その発祥といえば、六八〇年（天武天皇九年）、現天カ瀬町の岩松山峰に來現したと伝える八幡神（宇佐八幡の祖神）をこの地に迎え、当時の郡代が社殿を造営した、と伝えられている（『県歴史事典』）。

最後に夜明けダムそばの行徳家住宅を訪ねる。国重要文化財の指定をうけ、徳川期の重厚な家屋と室内、それに文化財の数々を見せて頂く。

晩秋の日田路の紅葉とさわやかな秋気、神仏への思いを胸いっぱい吸いながら、歴史への満足感と充実感で帰路を急ぐ。楽しい探訪会の日でありました。どうもありがとうございました。

（会員 北中町）

十一面観世音菩薩（国重文）



重文の行徳家住宅



永興寺にある8体の重文の仏像



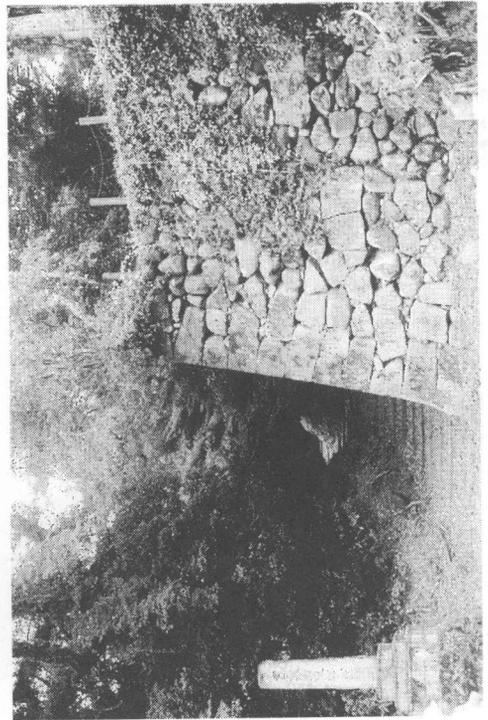
↑左↑增長天 右↑持國天 (重文)



↑左↑多聞天 右↑廣目天 (重文)



↑慈眼山仙像収蔵庫



永山布政所跡記念碑